

学校、英語でいえばスクールという言葉の語源にあたるギリシヤ語のもととの意味は「レジャー」だそうである。

日本の子供たちにとって、学校での勉強は、大学入試競争という、行く手の地平線にたちはだかる暗雲におびやかされながらの重苦しい時間の連続であり、のんびりと物を学び物を知ることとは、およそ縁遠いように思われる。

もちろん、子供たちというのは、その胸のうちに、つぎることのない生へのよろこびの泉を秘めているものだ。学校という時間と空間をみたしているのは、やはり子供たちのたのしく明るい笑い声であることを、私はあくまでも信じたいし、祈りたい。しかし現在の日本の学校教育制度の下で、いたいたしい幼い犠牲者が数多く出ているのも事実である。受験勉強という枠が強制的に定義する「必要な知識」を学び記憶する能力が、他の子供たちにくらべて少しばかり劣っているというだけで、ある場合には死へすらも追いやられる子供が、ただの一人たりともあつてはならないことは、誰の心にも明らかであるはずであろう。

私の研究室の若い研究者Tさんは、二年まえの五月、奥さんと小学一年生の坊やS君をつれてエドモントンにやってきました。学校のこと、学令期に入った子供さんをつれてカナダにやって来る日本人研究者の家族にとって大きな悩みである。親だけではない。子供さん自身もあれこれと小さい胸をいためるにちがいない。何よりもまず、言葉の問題がある。まる

っきり言葉のわからない学校に行つてどうしたらよいただろう。授業はわかるだろうか。勉強ができるだろうか。お友だちなんか、とてもできないのではあるまいか。

ともあれ、何をさておいても、学校にだけは一日もはやく通わせなければ、という日本人の親らしい判断で、アパートに落着くのもそこそこに、近所の小学校へ出かけて校長さんに面会して入学の手

エドモントン便り
「スクール」と「レジャー」
藤 永 茂

続きをする、ということになる。私と家内は、Tさん一家に同伴して、もよりの小学校のパーキング場に車を停めた。それまで不安そうに黙りこんでいたS君は、急に「みんな行っておいで。ぼく車の中で待ってるから」としづつていたのだが、なだめすかして校長室へ。受付けてくれた秘書も校長先生も、こうした場合の経験は十分。その打ちと

け方も、親しみの表現も、よくつばを心得ていて、S君の不安な気持も大いほぐれたようであった。

校長先生が父親に向かつて、「ほんとによい子だねえ。そうだろう、Tさん」と持ちかけたのを受けて、Tさんは、「いやあ、この子は、どうもバッド・ボーイで」と答えてしまった。これにはさすがの老練校長も一瞬絶句。わがいとこの愛妻、自慢の愛息を、愚妻、豚児と呼ばねばならぬ日本男児の悲哀よ、と突沸してくるおかしさをかみころすのに、私も一苦労することになってしまった。

そのS君、今は学校の英語に何の不自由もなく、勉強はよく出来るし、その上アイスホッケーの選手にまでなつて、カナダの小学校生活のたのしさを満喫している。この二年間に、からだもこころもすこやかに見事に成長したS君を見ると、「スクール」がもつともよい意味での「レジャー」でもあり得ることを信じたくなつてくる。

Tさん一家の場合にはけつして例外的にハッピーなケースというわけではない。私の見聞した限りにおいて、日本からやってくる子供さんが、こちらのスクーリングで、つらいみじめな思いをした例を知らない。大学受験の重圧の存在しないカナダの社会の中で、小学校や中学校が日本のそれとくらべて、子供たちにとって気楽な学びの場であることは否定の余地がなさそうである。

しかし、ほめつばなしも無責任というものであろうから、こちらの学校の思わしくない面も紹介しておくことにしよう。私のよく知っている子供で、父親は色の黒いメキシコ人、母親は白人の兄妹がある。二人とも母親の血がまざったのか、髪はブロンド、肌の色も白く、私の目には両親とも白人の子供と区別がつかないように思われるのだが、母親の話では、小学校で人種的にいびられるという。人種偏見というものは、何ともやりきれないものである。もう一つ。最近のエドモントンの新聞によれば、小学校五年生の女の子の父親が、学校で始まった自由選択コースのキリスト教宗教教育の時間に子供を出席させなかったために、その時間の受持ち教師（牧師の奥さん）とクラス・メイト総ぐるみのいやがらせに苦しめられた事件もある。日本とは少しちがつたいびられ方がカナダにはあるというわけである。

国際児童年（一九七九年）は過ぎてしまったが、子供たちの世界をたのしい明るさにみちたものにしよと努力は、そのまま、この世界全体をより住み良くすることに繋がっているものであり、大人たちの社会のみにくさが、たちまち子供たちの世界を暗くするのだということをお忘れないうちである。
(アルバータ大学教授)

ご愛読いただきました藤永先生の「エドモントン便り」は今回で終わります。次号から別の連載を予定しています。